

ルビタキ 英:Red-flanked Bushrobin 学: *Tarsiger cyanurus*

1. 分類と形態

分類: スズメ目 ツグミ科

全長:	約14cm	
翼長:	♂ 75.5-84.0mm	♀ 72.0-79.0mm
尾長:	♂ 55.0-63.0mm	♀ 51.5-58.5mm
嘴峰長:	♂ 10.0-11.5mm	♀ 10.0-11.5mm
ふ蹠長:	♂ 21.1-24.0mm	♀ 21.0-24.1mm
体重:	♂ 11.0-15.2g	♀ 10.0-17.8g

※山階(1941), Cramp(1988) による。

羽色:

メスは背面と翼がオリーブ褐色、腰と上尾筒、尾が光沢を帯びた青色。下面は薄いクリーム色。嘴と脚は黒い。脇羽は鮮やかなオレンジ色で、薄いクリーム色～白色の眉斑を持つ。

オスは1齢時(第一回夏羽)まで外見はメスと極似しているが、小翼羽が青味がかかる傾向がある。

1齢以上のオス(第二回冬羽以降)は、頭部から尾に至るまでの上面が青色、特に腰と上尾筒、尾羽は光沢を帯びた青色となる。翼は青く、小翼羽は金属光沢を帯びる傾向がある。下面は白色であり、白い眉斑を持つ。脇羽は明るい橙色。嘴と脚は黒い。幼羽は雌雄ともに、上面はクリーム色斑のある茶褐色の羽衣に覆われる。尾羽は青い。



写真1. ルビタキのオスの成鳥。
[Photo by 日比野敏行]



写真2.
ルビタキのメス(左)と、
1歳(第一回夏羽)のオス(右)。

鳴き声:

繁殖期のオスは、早朝より夕方まで1日中さえずり、天候が崩れても比較的よく鳴く。樹冠部でさえずることが多く、澄んだ笛のような声で「ヒュロロ ピュロロチュロリッ」という短めのフレーズを繰り返しさえずる。地鳴きは雌雄ともに「ヒッ、ヒッ」、「カッ、カッ」と少し濁った声で鳴く。

2. 分布と生息環境

分布:

ルビタキには2亜種があり、*T.c.rufilatus* はヒマラヤ地区と中国西部に分布する。短距離の移動を行い、越冬期には南下し、インド、ミャンマー、タイ北部に至るとされている。一方、*T.c.cyanurus* は日本、中国、モンゴル、ロシア等で繁殖し、この中でも北方の個体群は越冬期は南下、拡散する。東ヨーロッパとロシアの境界(フィンランド等)まで移動することは稀だが、少数の観察例がある(Cramp1988)。

日本では全国的に生息している。本州においては漂鳥であるが、北海道や東北地方などでは夏鳥である。越冬期には本州中部以南の低地にて普通に見られ、四国、九州、伊豆諸島、小笠原諸島、奄美大島、台湾などでも越冬する(日本鳥学会 2000)。

生息環境:

本州では標高約1,500m以上の亜高山～高山帯の森林で繁殖する。北海道を含む国内高緯度地域では、植相の垂直分布に伴い繁殖標高は低下する。繁殖環境は森林限界域の針葉樹低木林から亜高山域の針広混交林まで幅広い。越冬期は低地の低木や藪があるやや開けた環境で越冬する。

3. 生活史

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12月
非繁殖期					繁殖期 (本州の場合)						

繁殖システム:

一夫一妻制。オスが単独で盛んにさえずりながらなわばりを形成した後、メスとつがう。本種では造巢、抱卵はメスのみが行う。育雛における抱雛はメスのみが行うが、給餌は雌雄で分担して行われる。育雛時の給餌の分担はヒナの成長段階によって変化するが、ほぼ半々である。

巢:

地上営巢。土のくぼみや木の根と地面との隙間、岩のくぼみなどで営巢する。シラビソの葉などを土台にし、その上にコケや獣毛等を用いて、お椀型の巢を造る。大きさは約15cm×15cm。造巢はメスのみが行う(緑川 1970, Cramp 1988)。



写真3. 地面の小さな穴の中に作られたジュウイチにより托卵されたルビタキの巣。ルビタキの白っぽい卵の中にジュウイチの青い卵が見える。

卵:

造巢終了後、1日1卵を朝方に産卵する。卵は白色だが、鈍端付近に淡い茶色の細い斑が少数散在する。一腹卵数は3～6卵。約18mm×14mm。卵重量は1.6～2.3g。

抱卵・育雛期間、営巢回数、捕食、托卵:

抱卵は約15日間、巢内育雛は約15日間行われる(緑川 1970)。可能な場合は複数回繁殖を行い、1繁殖期における繁殖回数はつがいあたり1～2回である。ツツドリとジュウイチに托卵を受ける(緑川 1970)。卵やヒナが捕食される事が多い。捕食と托卵による影響が大きく、巣立ち率は約50%を下回る。



写真4. 巣立ち直後のヒナ。

越冬生態:

各個体が単独なわばりを形成し、越冬する(Cramp 1988)。

渡り:

本州では繁殖地である亜高山帯から、越冬地である低地へと移動する漂鳥とされる。その移動距離を示すデータは少なく、バンディングによる長距離移動と短距離移動のデータが数例あるのみである。この中には、北海道で捕獲された個体が九州や本州中部で捕獲された長距離移動の例も含まれる(山階 1997)。北海道などでは夏鳥であるため、北海道を通過する個体群は比較的長距離を移動すると考えられている。

4. 興味深い生態や行動、保護上の課題

● 独特の色彩発現様式

1歳オス(写真2右)は未成熟個体ではなく性的には成熟しており、青色のオス(2歳以上のオス, 写真1)と同様の繁殖を行う。このようにルリビタキのオスでは、最終的な羽色(青色)の発現のみが大きく遅れる。このような羽色の発現の仕方は他の多くの鳥では見られない特徴であり、世界的にも多くない。この独特の羽色発現の遅延現象は、Delayed Plumage Maturation (DPM)という名前がつけられており、日本語では遅延羽色成熟と呼ばれる(日本鳥学会用語委員会 2006)。

● 雄間闘争における視覚信号

ルリビタキのオスの外見の違いは雄間闘争に関係があることがわかっている(Morimoto *et al.* 2006)。繁殖地に到着したルリビタキのオスはそれぞれが盛んにさえずり、なわばりを確立する。この際、隣接するオスとの間で闘争が起こる。闘争行動は、オレンジ色の脇羽を大きく膨らませながら「ヒッ、ヒッ」と声を発する威嚇行動(中村 1995)から始まる。その後、雄間闘争はお互いを追い回す追いかけ行動、さらに相手につかみかかったりつき合いといった身体的接触を伴う直接闘争へと発展する(Morimoto *et al.* 2006)。オス同士が争う際、この雄間闘争の激しさが、戦うオスの色の組み合わせによって異なることがわかった(Morimoto *et al.* 2006)。同色同士が争うと、争いが直接闘争まで発展するケースが多い(図1(a),(c))が、異なる色同士が争う際には、直接闘争に至ることは稀であり、追いかけ行動までで済むことが多い(図1(b))。このことからオス同士は相手の羽色に応じて、闘争を避けて、そのリスクを減らそうとしている可能性がある。オスの年齢と連動した外見の違いは、オスの社会的地位を表す信号として機能しているのかもしれない。

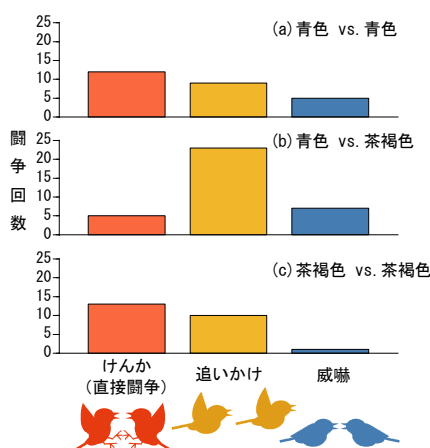


図1. 雄の羽色と闘争回数の関係。

● メスによる選り好みと羽色の関係

鳥類の多くの種で、派手なオスの方がメスに選ばれやすいことが知られている。しかしながら、ルリビタキにおける著者の研究では、2年間におけるメスの獲得率は色が異なるオス間で差はなかった。ルリビタキの大きく異なる雄間の外見が、本当にメスによる選り好みに関わりがないのか、それとも実は何らかの隠れたメカニズムがあるのかは今後の詳細な研究が必要である。

5. 引用・参考文献

- Cramp(ed). 1988. *Tarsiger cyanurus* Red-flanked Bluetail. The Birds of the Western Palearctic. Handbook of the Birds of Europe, the Middle East and North Africa, Volume V, 664-671. Oxford University Press, Oxford.
- 緑川忠一. 1970. 上水内郡誌編纂会(編). 長野県・上水内郡誌自然編, 785-792. 長野県上水内郡市役所, 長野.
- Morimoto, G., Yamaguchi, N. & Ueda, K. 2006. Plumage color as a status signal in male-male interaction in the red-flanked bushrobin, *Tarsiger cyanurus*. J. Ethol. 24: 261-266.
- 中村登流. 1995. 中村登流・中村雅彦(編). 日本野鳥生態図鑑 陸鳥編, 177. 保育社, 大阪.
- 日本鳥学会. 2000. 日本鳥類目録改訂第6版, 204-205. 日本鳥学会, 北海道.
- 日本鳥学会用語委員会(編). 2006. 鳥学用語集, 42. 日本鳥学会, 東京.
- Rohwer, S. 1975. The Social Significance of Avian Winter Plumage Variability. Evolution 29: 593-610.
- 山階 芳麿. 1941. 日本の鳥類と其生態 第二巻, 301-308. 岩波書店, 東京.
- 山階鳥類研究所. 1997. 渡り鳥アトラス鳥類回収記録解析報告書スズメ目編1961~1955年, 51. 山階鳥類研究所, 千葉.

執筆者

森本元 東邦大学理学部生態系研究センター 訪問研究員

ハクセキレイの越冬個体群を対象とした研究を行ったのち、ルリビタキの研究を始め既に8年目となりました。繁殖生態に関わる行動生態学的研究への興味とルリビタキのオスの二色性の不思議さに惹かれて始めたルリビタキの研究ですが、いざやってみると、一筋縄ではいかない手ごわい相手です。暖めている複数のテーマがあるので、しつこくルリビタキにこだわって、春から秋への季節のうつろいを感じながら調査地である亜高山暮らしを、今後も楽しみたいと思っています。

